

本年の日供神饌講社大祭・饗宴祭は、六月三十日、三重県講元講員の皆様により大膳職以下所役をご奉仕いただき、賑々しく斎行できました。ご報告とともに講員の皆様に厚く御礼申し上げる次第です。

### 伊勢神宮の式年遷宮

本年秋には伊勢神宮の式年遷宮が行われます。周知のように、伊勢神宮の式年遷宮は二十年に一度、内外両正宮以下、全別宮に至るまでの建物の建て替えとともに、大神様のご装束やご神宝に至るまですべてを新たに作り直すもので、そのために正宮のすぐ横に新殿の敷地が用意され、二十年ごとに動座していただくことになり、天武天皇のときに制度化されて以来、戦国時代の混乱期に一時中断した以外は連綿と行われており、すべてを作り直すことにより常に新しく、二十年ごとに御神威も大きくよみがえり、また技術の継承も可能となり、日本の伝統文化の一つの継承のあり方としても重視され、大切に守り伝えられてきました。



伊勢神宮内宮ご正宮

平成十七年に神宮林の山麓・山中で山口（やまのくち）祭・木本（このもと）祭が行われて造宮始めの由を山の神・木の神に申し上げ、ご用材の切り出しが始まりま

した。二十年四月に御敷地の鎮地祭、昨年三月に立柱祭・上棟祭が行われ、ご正宮本体の工事が本格化しました。この間、十八年と十九年には一般の人も参加が許される、ご用材を敷地内に引き入れる御木曳き行事が行われました。本年七月八月に、これも一日神領民として一般の参加が許される、お白石を敷きつめるお白石奉献行事が行われ、九月末には竣工、そして十月二日に内宮の遷御、五日に外宮の遷御という運びになっています。これに続いて明年にかけて各別宮のご造宮、遷宮が行われることになっています。

去る五月には出雲大社のご本殿のお屋根葺替え工事が竣工し御遷宮が行われたことも大きく報道されました。屋根の葺替えをもって式年造替を行う古社は少なくないのですが、ご装束・ご神宝に至るまで作り替えるのは伊勢の神宮のみで、全国民の心の拠り所としての神宮の大切さが現われているといえます。

### 燃水祭 七月五日

天智天皇のご治世は産業の基盤となるような記録がいろいろと残されています。その一つとして、日本最初の石油の記録は、大津宮



近江神宮燃水祭原油・ランプ

遷都の翌年、天智天皇七年（六六八年）の七月のことでした。越の国より「燃ゆる土」と「燃ゆる水」が献上されたと『日本書紀』は伝えていきます。燃ゆる水『燃水』とは石油のことであり、燃ゆる土『燃土』とは石炭・泥炭ともいわれてきましたが、近年は天然アスファルトのこととされています。越の国は現在の新潟県。なかでも現在の胎内市（旧黒川村）で

あつたといわれています。黒川村は、昔、川の流れが黒くなるほど燃える水が湧き出したことから、「黒川」の地名がついたと伝えられています。昭和三十年代までは手掘り井戸で原油が採掘され、灯火などに利用されていたとのことです。

地球温暖化問題が世界的に重大な問題となり、化石燃料のマイナスイ面が強調されることが多くなってきた昨今ですが、東日本大震災にともなう原子力発電所の事故以来脱原発への志向が高まり、さりとてただちに自然エネルギー中心に転換するのは困難と見られています。現代文明を前提とする以上、当面は石油を中心とする化石燃料に頼らざるを得ません。自動車など輸送機械の動力源、化学製品の原料としても当分の間は重要さは変わることがないと思われまます。毎年七月一日（または二日）、新潟県胎内市黒川において燃水祭が行われ、その折油坪という池で採油された原油が、六日後の七日（七日が土日の場合は五日）に近江神宮で行われる燃水祭において、黒川からの使者により大前に奉獻されます。そして石油業界の代表者の手により、ランプに灯をともして献灯の儀を行い、現代文明の基盤である石油への感謝の誠を捧げます。

### 鎮火祭と楼門炎上六十周年

近江神宮では毎月二十七日に鎮火祭を行い、不慮の災害防止と防火、家内安全と世相向上・社会安穩への祈りを込めています。この日に必ず参列される熱心な崇敬者の方もおられます。

鎮火祭はもともと昭和二十八年五月二十七日に放火によって楼門が火災に遭ったことにもとづき、その一



檜皮・白木時代の楼門

周年のときからその当日に復興と防火の祈願祭を行うようになったもので、その後、毎月二十七日に行うようになりました。本年五月のこの日は火災より六十周年でした。

近年、凶悪犯罪が増え、各種の凶行が頻繁に報道されていますが、昭和二十年代は戦災孤児や貧困家庭も多く、犯罪の多い不安な時代でした。楼門の火災もそのような少年によるものだったということです。その後、青少年の善導へのささやかな活動として、発足間もない近江神宮の敬神婦人会も、少年の更生教育施設であった国立武蔵野学院院長のたびたびの講演を行っています。

楼門は昭和十九年に建設され、当初の建物はわずか九年のものでしたが、その後、経済的にはまだまだ貧しかった時代にもかかわらず崇敬者の皆様の熱心な奉賛により、昭和三十一年九月に再建竣工の運びとなりました。元来は白木で屋根は檜皮葺きであったのですが、焼け焦げて残った部分を利用するためあつて朱塗りとし、銅板葺きで再建されました。今日の近江神宮楼門のイメージはこの後形作られたことになりました。

### 本年後半の祭典行事

- |              |                      |
|--------------|----------------------|
| 七月五日午前十一時    | 燃水祭                  |
| 七月二十七日・二十八日  | 全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会 |
| 八月二十四日午前十一時  | 弘文天皇祭                |
| 八月二十五日午後一時   | 献書祭                  |
| 十一月三日午後〇時三十分 | 流鏝馬神事                |
| 十一月七日午前十一時   | 御鎮座記念祭               |
| 十二月二日午前十時    | 初穂講大祭                |
- (一日が日曜日のため本年は二日)

講社通信は近江神宮ホームページでカラーで見られます。

<http://www.omijingu.org/>「日供神饌講」ページ